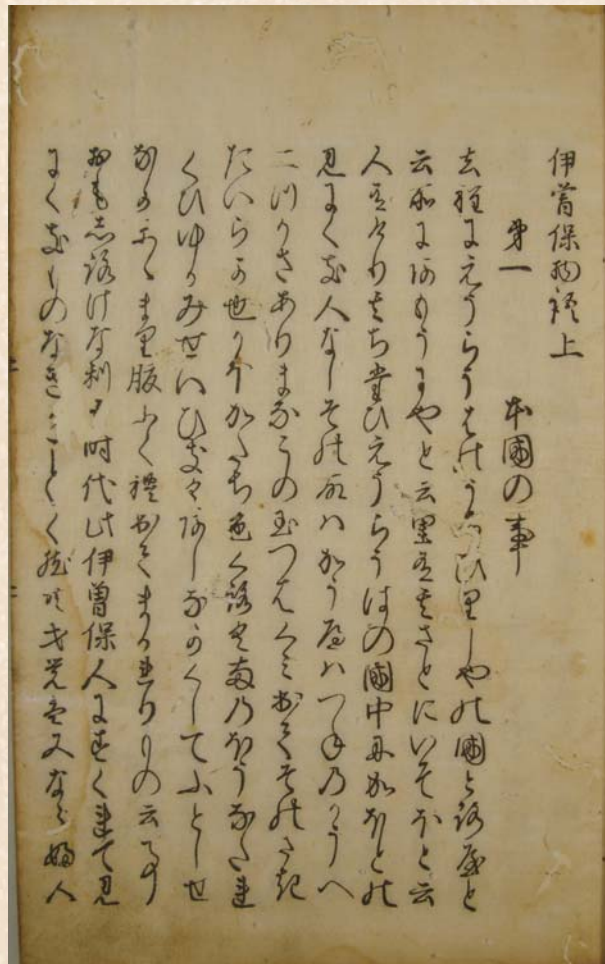


国文研ニュース

No.37
AUTUMN 2014



『伊曾保物語』

目次

●メッセージ	
データベースの時代の中で思うこと	中島 国彦 1
●研究ノート	
室町の学芸と絵画－鶉の九助のこと－	齋藤真麻理 2
「居候地頭」と知行所村々	太田 尚宏 4
特定研究「短冊手鏡の内容と成立に関する研究」	中村健太郎・海野圭介 6
第6回 日韓古典籍研究交流会	入口 敦志 7
●トピックス	
第7回日本古典文学学術賞受賞者発表	8
第7回日本古典文学学術賞選考講評	8
第38回国際日本文学研究集会 プログラム	10
シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」の開催	太田 尚宏 12
国際連携研究「日本文学のフォーラム」第2回国際シンポジウム	神作 研一 12
子ども霞ヶ関見学デー	13
『HUMAN——知の森へのいざない』第6号	13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況	14

データベースの時代の中で思うこと

— 作品本文のさまざまな姿、そのデータベース化をめぐる —

中島国彦（早稲田大学文学学術院教授）

本格的なデータベースの時代までの年月を振り返って

10年にわたる「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が、本格的に始まる。約30万点の古典籍の画像データベースを整備して世界に発信するという、スケールの大きな計画は、楽しみである。30年もの準備期間を要して完成した、書物の形でのデータベース『国書総目録』の刊行は、1960年代の半ばに大学に入ったわたくしに、強い印象を与えた。それから半世紀たったが、今回それと同じ規模の新しい画像のデータベースが構築されていくのは、たいへん喜ばしいことである。

近代の出版の歴史に関心を持つ者として、わたくしは、『日本古典全集』『日本名著全集』などの古典のまとまりのある体系的な出版物が、折々の文学研究に果たした役割の大きさに注目してきた。学生時代には、岩波書店の『日本古典文学大系』で作品に親しんだ。仲間と読書会の連絡をする時、「大系に入っているから」という言い方を、よくしたものである。本文に触れることが難しかった後深草院二条の『とはずがたり』が、まず『日本古典全書』に入り、比較的早く岩波文庫に収録されたのも、学生時代である。書陵部の孤本である『とはずがたり』が、こうして中世女性文学の代表作となって立ち上がって行く姿を、目の当たりにすることが出来た。二条を主人公にした小説『中世炎上』を構想していた瀬戸内晴美が、定期的に学術的な助言をする研究者を探している、という話を聞いたのも、その頃である。

学部生の時には、俳諧の中村俊定先生から、『冬の日』の板本の面白さを教えていただいた。大学院に入ってから、伊地知鐵男先生の古典籍を読む授業を受けた。ある時、先生はわたくしの目の前に写本の写真版を広げ、読むように指示をされた。冒頭は、「花はさかりに」と読める。一字一字辿りながら、そらんじている本文を声に出し、何とか切り抜けた。正徹本『徒然草』の複製だったと思うが、近代専攻の学生に対する先生のお心が偲ばれる。最近出された『古典籍研究ガイド』(笠間書院)のような便利な本は、無かった時代である。現在わたくしは、三段組みの小学館『新編日本古典文学全集』を紐解くことが多いが、それに加えてもう一段、画像データが付いていたら、どんなに有意義なことだろう。しかし、それは、書物の形での実現は難しい。今回の新しいデータベース構築の中で、本文のテキストデータと画像データとの連動が整備されていくと、どんなにありがたいことかと思う。

近代文学における自筆資料の画像化と今後の研究

作品本文のさまざまな姿に関しては、近代文学では、戦後の出版隆盛の中で本文がどのように定着して行ったかが、興味深い。読みにくかった藤村『破戒』初版本の本文、削除部分を復元した荷風『腕くらべ』私家版の本文なども、1950年代の筑摩書房『現代日本文学全集』に収録され、多くの読者を得た。その後、個人全集も次々と刊行され、作品を読む基盤が整って行った。一方、1963年に発足した日本近代文学館の活動からは、研究の新たな可能性が生まれた。多くの文芸雑誌の複製版・マイクロ版によって「初出」が容易に確認出来るようになり、1968年から稲垣達郎先生を中心に進められた『名著複製全集・近代文学館』は、「初版」という書物の中での本文のあり方を再認識させてくれたのである。

そして、現在は、作品が活字に定着される前の、「草稿」「原稿」などの自筆資料への関心が深まっている。中でも、自筆資料の公開、そのための一つの方法としての画像データベース構築に、眼が向けられている。近代文学の自筆資料の画像公開は、国文学研究資料館が進めて来た古典籍のデータベース化と比べかなり遅れていたが、近年その機運が高まった。以前から、『舞姫』『坊っちゃん』など、自筆原稿の忠実な複製本も刊行されていたが、昨年から今年にかけて完成した日本近代文学館編の『太宰治直筆原稿集(DVD版)』『太宰治自筆資料集(オンライン版)』(雄松堂書店)は画像データによるもので、新たな進展であった。昔は考えられなかったことだが、草稿・原稿・雑誌初出の活字本文の画像が、画面上で対照出来るのである。

また、創立50周年の記念として、四百ページ余の、日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』(八木書店・近刊)が計画された。60余名の作家の実例を通して、草稿・原稿の実態、本文の生成から出版に至る過程の諸問題に、照明が当てられる。多くの人々に、草稿・原稿の所在や、その面白さを示すことは、近代文学における総合的な自筆資料の研究の出発点となると思う。

データベース化の試みにおいては、蓄積のある古典籍の画像化の動きに学ぶことが多い。明治以前の古典籍と比べ、近代文学に関しては、わずか150年間の資料だが、国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」と並んで、近い将来、近代文学資料とりわけ自筆資料の画像データベースの整備がなされ、作品の新しい研究の地平が開かれることを願っている。

室町の学芸と絵画—鶉^{うずら}の九助のこと—

齋藤真麻理

1. 異類物前夜

室町末期から江戸前期にかけて、多くの室町物語（御伽草子）が成立した。作品数は500編に近く、美しい挿絵（奈良絵）を伴う絵巻や絵本としても楽しまれた。作者や絵師は殆ど不明だが、当時の学芸や風俗、室町人の心を伝えて余すところがない。約70編は異類物と呼ばれる作品群である。このように分類できるほど、鳥獣虫魚、植物、食材、器物など、人間とは類を異にするものたちが人間さながらに歌合に興じ、あるいは悲恋に泣き、合戦に赴き、世を捨てる。

作者たちは自らの教養や機智を駆使してこれらを創作しているが、その淵源は恐らく院政期の歌合や題詠の盛行に溯る。この時代に歌題は多様に展開し、『六百番歌合』や類題集などには、鳥獣はか異類物の主人公が歌題として登場するようになる。

本稿では異類物の『ふくろふ』から諸鳥の詠歌場面に絞り、祝言性に着目して絵画表現を検証する^{注1}。特に鶉は万葉以来の歌材だが、勅撰集では殆ど歌題として明示されず、『古今和歌六帖』はじめ類題集では分類項目、『六百番歌合』では歌合題となる。いわば、再発見された歌題の一つである。

2. 室町物語『ふくろふ』

『ふくろふ』の「鶉^{うずら}姫」は琴を弾く姿を梶に見初められる。梶は恋文を送り、越後の米山薬師に成就を祈る。逢瀬は叶い、諸鳥は姫への恋を歌に詠んだ。しかし、失恋した鶉は激昂して姫を殺害し、梶は出家して菩提を弔ったという。

古い伝本には江戸初期の松本隆信氏蔵『ふくろふ』（奈良絵本2冊）や東京富士美術館蔵『うそ姫物語』（もと大型奈良絵本、絵巻1軸）がある。富士美本は諸鳥の詠歌までで後半を欠くが、現存本文は松本本とほぼ同じ。冊子としては20丁、松本本の約5分の4に

当たる。後半も同様であれば、もと奈良絵本1冊であったか。長文の後日談が備わっていれば2冊本かもしれない。欠落部分の出現が期待される。

松本本は春の鳥である鶉に合わせて、挿絵の多くに桜を描く。そこで注目されるのが雲谷等哲（1631-83）の屏風だ（図1）。冬の鳥である梶に満開の桜、しかも梶の前には喉の赤い小鳥が止まって顔を見上げている。鶉であろう。松本本を想起させる図様だが、むしろ軽々に影響関係は論じられない。しかし、『ふくろふ』は他の室町物語や仮名草子をはじめ、多くの文芸に影響を及ぼしている。屏風の制作当時、「梶の恋」といえば「鶉」が俳諧の付合であった（『類船集』）。少なくともここには梶と鶉にまつわる連想が働いているのであり、その源は室町物語『ふくろふ』であったろう。



図1 「山水・人物・花鳥図押絵貼屏風」（『知られざる御用絵師の世界展』朝日新聞社1992より部分引用）

3. 祝言の挿絵

松本本と富士美本では挿絵の風情が全く異なる。最も特徴的なのは諸鳥の詠歌場面で、松本本は雄1羽ずつ、2種の鳥を対として描き、「諸鳥の歌合」に仕立てている。

富士美本は、各種の鳥をほぼ雌雄2羽で描く。これは祝言性の強い花鳥画の手法である。富士美本は物語からの

逸脱を顧みず、祝言の表象を選んだのだ。小さな瀧の傍らに雌雄の雉を配し（図2）、最後は鶉の雌雄にめでたい瓢箪（夕顔）を添えるなど、諸鳥の詠歌は終始、花鳥画の世界に彩られている。

図3は地上へ降りようとする鶉、それを見上げて鳴く鶉、餌を啄む鶉を描く。詞書によれば鶉の名は「九すけ」だが、もはやどれが彼なのかは分からない。



図2 東京富士美術館『うそ姫物語』（東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom）



図3 東京富士美術館『うそ姫物語』（同）

4. 鶉を描く

『言継卿記』永祿7年（1564）5月9日条は「鶉籠」の語が見える早い例であり、既に鶉が愛好されている。江戸時代には鳴き声を競わせる鶉合が流行した。「籠もちつれて帰るさの袖 暮るより鶉合や見てぬらん」（『犬子集』）、「此うづら代はと問へば高くいふ 人の心よくにふければ」（『新撰狂歌集』）、「ついに鶉は賄賂になりかねないほど、高値で取引されるにいたった

注1. 齋藤真麻理『異類の歌合 室町の機智と学芸』（吉川弘文館、2014）参照。富士美本の梶の寝姿には『伊勢物語』「狩の使い」の挿絵の影響があるか。
注2. 『花鳥画の世界』1-11（学研、1981-83）、藤島幸彦「土佐光起の鶉図—東博本『秋郊鳴鶉図』『野菊鶉図』を中心として—」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊9、1982.3）、狩野博幸「秋草図に分け入って」（『月刊文化財』348、1992.9）、実方葉子「土佐光起の鶉」（『茶道雑誌』60-11、1996.11）、細川博昭「大江戸銅い鳥草紙」（吉川弘文館、2006）、飯倉洋一ほか「中井履軒・上田秋成合賛鶉図について」（『懷徳堂研究』3、2012.2）参照。

(『翁草』巻一「阿部豊後守鶉を放つ」)。これと呼応するように量産されたのが「鶉図」であった^{注2}。これらを注文できたのは、鶉合に興じていられる教養ある富裕層だったろう。豪華な鶉合の席が祝言性を帯びていたことは想像にかたくない。

「粟に鶉図」(土佐光起1617-91、国立アムステルダム美術館)では粟穂の下で1羽が鳴き、1羽が餌を啄む。「鶉図」(同、立花家史料館)は地をめがけて飛ぶ鶉、それを見上げる鶉、傍らに伏す鶉を描く。姿態により、飛び鶉、鳴き鶉とも称される(『日本画大成』2、東方書院、1932)。『うそ姫物語』には飛び鶉、鳴き鶉、諸鶉の要素が盛り込まれ、いかにも鶉図隆盛期の挿絵らしい。物語から逸脱してでも祝言性を獲得しようとしたその志向は、花鳥画における祝言性を視野に入れ、より深く考察されるべき問題である。広く奈良絵本の持つ祝言性とも関わるだろう。

鶉図には掛幅装が多いが、茶掛のほか、鶉の優れた鳴き声を予祝して鶉合の場に飾られたのではなかろうか。天神像や名号を連歌の席に掛けたのは周知のとおりである。「秋圃雙鶉図」(土佐光起、『日本画大成』2)の鶉は大きく嘴を開き、高々と鳴く。「秋郊鳴鶉図」(土佐光起・光成、東京国立博物館)は諸鶉に大ぶりの菊を合わせるが、元来、中国では菊は祝言性の高い植物だ。めでたい芙蓉などを添えた鶉図も残り、晴れの席に似つかわしい。

和歌に詠まれた鶉は、秋の寂寥や人を待ちわびる思いを託された例が多い。『伊勢物語』の深草の女も想起させる。こうした文脈に引かれ、鶉図は寂々とした解釈で一括される傾向があるが、鶉合の盛行を思えば、祝言性を検討する必要もあろう。

憶測を逞しくするならば、諸派が描く秋草屏風も鶉合に用いられたかもしれない。生きた鶉を主役に秋草の屏風を飾れば、そこは鶉の名所となる。深草や粟津野に風がわたってゆく。あとは「鳴け鶉ここも書院の床の山」(『詞林金玉集』)というところか。

5. 鶉の九助のこと

鶉図の祝言性を考えるには「鶉の九助」が手がかりとなりそうだ。九を冠する擬人名は文禄3年(1594)写の室町物語『鴉鷲記』「鶉九郎犬養両片」が古い。鳴き声をk音で把握したのが命名の根拠であろうが、藤原定家「詠花鳥和歌」が鶉を九月にあて^{注3}、『本草綱目』が交州記を引き、九月に黄魚が鶉に変ずるとした記述も無視できない。

一方、台北の国立故宮博物院には「久安大吉図」なる明代の鶉図一幅がある(『故宮書画図録』8、1991)。大樹に多くの瓢箪が下がり、一對の朱雀が憩い、樹下には9羽の鶉が遊ぶ。鶉も鶉もウズラのこと、鶉は「安」に通じ、「九鶉」は「久安」「求安」に通ずる。これは鶉9羽による吉祥図なのである。作者は陸治(1496-1576)と伝えるが未詳、乾隆帝の御物であった。嘉靖丙寅(1566)の年記があり、詩塘に「御題」として乾隆帝作の七言絶句2首を記す。詩は絵の情景を詠じ、平安な世を称え、万物の命の謳歌を言祝ぐ。

百尺喬柯翠蔭鋪(百尺の喬柯 翠蔭しく)／盈枝磊落遍懸壺(盈枝磊落として懸壺遍し)／珍禽盈九探芳集(珍禽九に盈ち 芳を探して集う)／題繪開韶吉語符(絵に題して韶を開く 吉語の符)／獻歲臨軒慶履端(獻歲 軒に臨み 履端を慶す)／久安寰寓益求安(久しく寰寓に安んじて益す安を求む)／聿宣陽徳生機暢(ここに陽徳を宣ふれば生機暢じ)／品

物咸亨兆庶歎(品物咸亨して兆庶歎ぶ)／御題 陸治久安大吉圖／臣英和奉／勅敬書

中国では近代に入ってなお、菊と鶉9羽で「九世安居」を表す吉祥画が作られた。鶉9羽の画題は「久安大吉」図のみではなかったはずだ。中世日本でも、五山僧や上層の知識階級ならば「九鶉」の存在と意味を知る機会があったのではないかと^{注4}。

最後に、名古屋市博物館の有名な「秋草鶉図屏風」を見ておこう(図4)。一面の薄の中、右隻にふと開けた明るい空間を一見すると、親鳥2羽と雛7羽、計9羽の鶉が目に入るが、実は奥の親鳥の下に2羽の雛が隠れている^{注5}。遠目には9羽の親子、熟覧すれば9羽の雛がいるのであり、「九」という数字が二重に浮かび上がってくる。

もとより九は陽数であり、構図や先行作品との関係等、美術史的観点からの検討を要するが、文学研究の立場から「九鶉」の意を重ねると、鶉たちは屏風の注文主や持ち主への祝言の挨拶にも見えてくる。鶉合と鶉図の流行した時代、華やかなその行事に合わせ、当家の繁栄と安寧を言祝ぐ屏風だったのかもしれない。



図4 名古屋市博物館「秋草鶉図屏風」

※本稿は国文研フォーラム(2014.5.28)の発表に基づく。
※図版掲載をご許可くださった諸機関に御礼申し上げます。

注3. 武野恵「近世における定家詠月次花鳥歌絵の展開—吉村孝敬作品を中心に—」(『MUSEUM』414、1985.9)、下原美保「元禄期における定家詠月次花鳥歌絵についての考察—光起本、探幽本、具慶本を中心とした比較—」(『美術史』146、1999.3)等参照。

注4. 五山の詩には横川景三「屏風賛 鶉雪竹」、東沼周巖「題画 鶉 有筵菊」等があり、『宣和画譜』「雪景鶉鷄図」や李安忠「野菊秋鶉図」(台北国立故宮博物院)を思わせる。なお、15世紀初頭から足利將軍家が明帝や朝鮮国王に屏風を贈呈して領賜品を得ており、明和元年(1764)には「秋草二鶉」屏風が朝鮮へ贈られた。榊原悟「美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち」(ペリかん社、2002)参照。中国の吉祥画は東京国立博物館図録『吉祥』(1998)、『中華五福吉祥図典』(国書刊行会)、『中国美術全集』(人民美術出版社)等参照。

注5. 隠れている雛の数は同館に確認し、山田伸彦氏よりご丁寧にご教示を賜った。なお、竹内美砂子「秋草鶉図屏風小考」(『名古屋博物館研究紀要』12、1989.3)等参照。

「居候地頭」と知行所村々

—武蔵国多摩郡和田村石坂家文書から—

太田尚宏（国文学研究資料館准教授）

武蔵国多摩郡和田村石坂家文書

国文学研究資料館では、立川移転を契機に、新たな“地元”となった多摩地域に関する館蔵歴史資料の目録刊行を進めている。その一環として本年3月、筆者の担当による『史料目録第98集・武蔵国多摩郡和田村石坂家文書目録』が刊行された。

和田村は、現在の東京都多摩市和田一帯（多摩都市モノレール「大塚・帝京大学」駅の北東側）に位置した村で、もともとは1ヶ村であったが、元禄年間（1688～1704）までに上ヶ和田村（旗本和田氏知行所）・中和田村（旗本浅井氏知行所）・和田並木（旗本山角氏知行所）という3つの地域に分割された。このうち中和田村は、村高が99石1斗3合、明和5年（1768）の家数・人数は18軒・76人、弘化3年（1846）には12軒・61人といった規模の小村であった。

石坂家（現在は石阪姓）は、この中和田村の組頭・年番名主および定名主を務め、明治維新後に再び3つの地域が合併して成立した和田村の名主・村用掛・戸長を歴任した。石坂家文書は、同家の歴代当主が上記の役職に就いていた際に作成・収受した公的文書や、家の経営・家政に関する私的文書など、3178件の文書から構成される。

小稿では、この石坂家文書の中から、領主の旗本浅井氏と知行所村々との関係を示す少々変わった内容の文書を取りあげ、多摩地域における旗本領の様子を紹介してみたい。

中和田村領主の旗本浅井氏

中和田村を知行所とした浅井氏は、三河以来の譜代旗本で、將軍の親衛隊である御書院番・御小性組の番士を務める「両番筋」の家柄であった。石坂家文書にある系図¹⁾によると、浅井家の系譜は、①政胤－②元貞－③元吉－④元久－⑤元忠－⑥元重－⑦元武－⑧元知（嫡孫）＝⑨元豹－⑩元定－⑪元褒＝⑫元義と続く（＝は養子）。このうち④の元久は、③の元吉の遺領のうちから546石の分知を受けて分家として独立したが、兄の家が無嗣断絶となったため、元久の家筋が同家の系譜を引き継ぐ形となった。また、⑤の元忠の時代には、武蔵国入間郡鯨江郷の知行所220石が多摩郡下田村（日野市）・寺方村（多摩市）・中和田村へと移された。浅井氏が中和田村の領主となったのはこのときからで、上記の3ヶ村に旧来の知行所である清水村（東大和市）をあわせて、「知行所四ヶ村」と称していた。

⑧の元知には実子がなく、文化元年（1804）12月に元知が重病となった際、母方の実家である京極三右衛門家から

次男の元豹（⑨）を急養子として迎え入れた。ところが、元豹はふだんから素行が悪く、文政2年（1819）閏4月には、幕府から「行跡不宜」という理由で隠居・差控を命じられた。家督は実子の元定（⑩）が継ぎ、天保7年（1836）には御番入して御小性組に属したものの、3年後の同10年11月に死去、跡式は長男の元褒（⑪）に引き継がれたが、これも幼くして亡くなり、家督は弟の元義（⑫）が継承することになった。

3代にわたる“居候”生活

浅井家では、元豹が不行跡で隠居を命じられて以来、自らの屋敷経営を維持できず、他の旗本屋敷への同居を繰り返す“居候”生活が続いた。元豹は隠居とともに実家の京極家へと戻り、新たな当主の元定は、母方の実家である川井越前守家に引き取られて同居することになった。

旗本家などでは、当主が幼少である場合、成人するまで後見人となった親類の家に同居するという事例がしばしば見受けられる。しかし浅井家の場合は、これとはやや趣が異なっており、元定は川井家から山田仁右衛門家、さらには大原四郎右衛門家へと屋敷を転々として“居候”を繰り返した。この間に元定は御小性組への御番入を果たしているが、ついに自分の屋敷へ戻ることはなかったのである。

続く元褒も、家督相続直後に母方の実家の千村豊前守家へ預けられ、その後梶川庄兵衛家へと移り、そこで死去している。跡を継いだ弟の元義は、祖父の元豹が隠居生活をおくっていた京極家を頼って身を落ち着かせている。

居候先を次々と替えているのは、預り先の旗本家の用人などが、懇意にしている別の親類の旗本家などと交渉し、厄介者の居候に転居をせまる「同居替」が行われていたためと考えられる。前述した浅井家系図を見ても、浅井氏が同居した旗本のうち、血縁関係のあることが明らかなのは川井家・千村家・京極家のみで、山田家・大原家・梶川家については浅井家との関係がわかっておらず、浅井家の遠縁あるいは居候先の旗本家の縁者である可能性が高い。

このような浅井家の“居候”生活の背景には、旗本財政の悪化による家政の動揺があった。旗本の財政基盤は、基本的には知行所からの年貢収入のみであり、固定的な収入の一方で江戸での消費生活の拡大により支出は増大する傾向を示し、収支のバランスがくずれて財政悪化が恒常化したといわれる。浅井家などの旗本領主は、赤字を補うため、知行所に対して先納金（翌年以降の年貢前借）をはじ

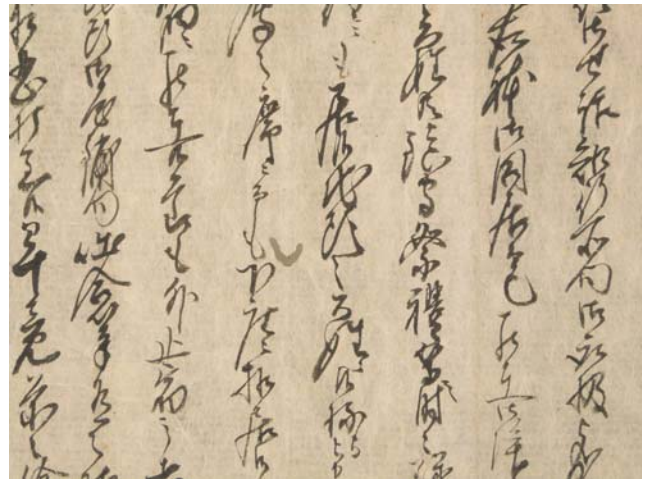
め、さまざまな名目の御用金を課して当座の資金を確保しようとした。知行所でも、当初は村内への割り掛けや村役人の自己資金の捻出などで負担に応じていたが、やがてこれらの資金が枯渇すると、周辺地域の金主への借金（他借）を行うようになる。しかし、たび重なる先納金・御用金の賦課により、村方で他借が繰り返されると、知行所周辺の金主も返済不能になることを警戒して貸し渋りの動きをみせ、借り先に窮した知行所村々では、領主に金融市場の広い江戸の中で金主を見つけてもらい、その返済を村方が保証する方法（引請）を用いるようになった。

このような借金に借金を重ねる慢性的な財政窮乏に加え、浅井家では元約の不行跡による出費がかさみ、完全な「勝手向不如意」の状態に陥っていたのである。

立ち上がる「居候地頭之百姓」

領主が拝領屋敷に居住せず、他の旗本屋敷への「同居」を繰り返している状況は、知行所の農民たちにとって、さまざまな不利益をもたらす要因となっていた。弘化3年（1846）正月に知行所の4ヶ村が京極家へ差し出した願書²⁾によれば、こうした影響として、④村の祭礼のときなどに他村の者から「居候地頭之百姓」（地頭は旗本の意）などと罵られる、⑤村々の集会の場では、村役人が他村の者に遠慮して下座に控えるようになる、⑥領主の御用で江戸の公事宿へ宿泊したときも、相部屋の者から色々と言われるのに気後れがして同室を避ける、⑦他の旗本知行所の者たちと屋敷向きについて会合した際も、侮られないように耐え忍んでいる、といった点が列挙されている。

京極家へ居候している元約や元義の暮らしぶりも、知行所の者たちにとっては粗末な待遇であると映っていた。上記の願書では、⑧京極家の用人が元約や元義ら9人を長屋の6畳間に押し込め、知行所の者たちと面会させず、昼夜の戸締まりを厳重にしている、⑨京極家の家臣は、中間・小者に至るまでこうした状態を見て、元義らへ雑言を浴びせるようになった、⑩前年の暮れに近隣で火災が起こった際、京極家では6畳間にある衣類や家具を運び出す者もなく、元義らは付き添いの者もないまま、知行所の村役人が



「居候地頭之百姓」という文言（中央部）が見られる願書

止宿していた公事宿へ避難してきた、⑪今年の年頭御礼のとき、元義は浅井家の定紋ではない駿斗目や桁丈の短い垢付きの粗服を着せられていた、などの点を指摘し、禄高500石の旗本に似つかわしくない冷遇ぶりに「一同落涙歎息」したと述べている。誇張された表現ではあるが、当時の元約や元義が受けていた処遇の一端がうかがわれよう。

知行所村々は、「居候地頭」のままでは元義が先祖の菩提を弔うこともままならず、文武修業も行き届かずに「不孝」「不行跡」ばかりがつのるとして、屋敷を建てて独立させたいと、そこへ知行所の村役人が交替で出勤して出費をチェックするという仕法を立て、京極家へ提案した。石坂家文書の中には、弘化2年前後の浅井氏の出金状況を記録した「浅井様御定用并臨時御入用留帳」³⁾が残存しており、知行所村々が実際に地頭所の出費を調査していたことがわかる。知行所村々は、「地頭之困窮は知行之衰微」という認識のもと、領主浅井氏の家政改革へと踏み出していったのである。

1) 石坂家文書No.513。

2) 石坂家文書No.271-1～3。

3) 石坂家文書No.69-1。

特定研究「短冊手鑑の内容と成立に関する研究」

(研究期間：平成26年度～平成28年度)

中村健太郎(帝京大学短期大学助教)、海野圭介(国文学研究資料館准教授)

本年度(平成26年度)より3ヶ年の計画で標記の共同研究が開始された。本研究は、ご所蔵者のご意向を受け、過年度に書誌的調査を行った短冊手鑑(個人蔵(毛利家旧蔵)、上下2帖)を直接の対象とし、所収される短冊の内容と筆跡、製作年代などについて具体的かつ総合的に検討を加え、併せて、短冊を素材とした研究のあり方を探ることを目的とする。

対象とする短冊手鑑は、短冊の始発時期といわれる鎌倉時代後期頃に認められた所謂白短冊の遺品をはじめとして、南北朝、室町期から近世前期頃までの天皇・公家・武家・僧侶・連歌師等々の署名入り短冊を多く含んでおり、それぞれの詠作資料としても、また短冊手鑑という存在の文化史的意義を考える上でも貴重な資料であるといえる。

自詠の和歌を詠者の自筆で認めた例が多く残る短冊は、文学研究、とくに中世・近世和歌の研究においては重要な資料であることは改めて述べるまでもないが、のみならず、その筆跡や料紙装飾などは書学・書道史学、あるいは美術史学の観点からも注目されてよい資料である。しかしながら、それらの研究分野においても短冊それ自体は研究対象として取り上げられることは多いとは言えない状況にある。その理由としては、伝存数がきわめて膨大であり、ある特定の作者や時代に限ったとしてもその総体の把握がほぼ不可能であることや、資料そのものの真贋問題が作品評価に直結することが多く、研究対象としての取り扱いが難しく誰もが容易に活用できるという状況にないことなどが挙げられよう。

本研究では当該短冊手鑑の内容の検討を基盤として、短冊の形式と時代的変遷、筆者と内容、筆跡と料紙、手鑑そのものの成立年代などについて考察を加え、併せて、国文学、歴史学、書誌学、書学・書道史学、美術史学などの視点から短冊の資料性につき報告を行い討議を重ねることで、研究資料としての短冊の有効的活用方法と短冊資料を用いた研究方法の具体例を提示することを旨とする。

研究代表者及び分担者

研究代表者 中村健太郎(帝京大学短期大学・助教)

研究分担者 久保木秀夫(鶴見大学文学部・准教授)

田中 潤(東京文化財研究所・研究補佐員)

舟見 一哉(文部科学省・教科書調査官)

別府 節子(出光美術館・学芸員)

緑川 明憲(慶應義塾横浜初等部・教諭)

山本 啓介(新潟大学人文社会・教育科学系・准教授)

石澤 一志(当館研究部・特任助教)

入口 敦志(当館研究部・准教授)

海野 圭介(当館研究部・准教授)

第6回 日韓古典籍研究交流会

入口 敦志 (国文学研究資料館准教授)

2014年7月29日、韓国国立中央図書館(以下、中央図書館)において、第6回日韓古典籍研究交流会が開催された。

韓国国立中央図書館には数多くの日本古典籍が所蔵されている。『国立中央図書館所蔵 外国古書目録(中国・日本篇)』IからIV(1976年～1979年)が刊行されており、その概要を知ることが出来る。国文学研究資料館(以下、当館)では、目録のうち、日本の古典籍についての悉皆調査を行ってきた。松野陽一元館長の主導によって始まり、当館の立川移転等による中断を挟みながらも、継続的に現在まで行ってきており、その主要なものについてはほぼ調査を終えている。また、マイクロフィルムによる収集も行ってきた。調査と収集については、中央図書館の大変友好的な協力によって遂行されたことを特記しておきたい。

その調査の中で、単に日本の研究者のために調査するだけではなく、成果を韓国の研究者や一般市民にも広く伝えるべきではないかという声があがってきた。何よりも、中央図書館の方々が、どういう資料があるのかを知りたいということで、報告会を開こうというのが発端であった。更に、我々日本の研究者としては、折角韓国で開催するのであるから、是非韓国の書物についても学びたいということもあり、相互に研究報告を行うかたちをとることになった。「交流会」という所以である。中央図書館の奉成奇氏は、韓国における活字印刷についての権威でもあり、そのお話をうかがうことから始まった。

今回はその第6回目。プログラムは以下の通り。

日時 2014年7月29日 14:00～17:30
会場 韓国国立中央図書館 地図資料室セミナー室(5階)
挨拶 成 正姫(国立中央図書館・資料管理部長)
今西祐一郎(国文学研究資料館・館長)
司会、奉成奇(国立中央図書館古典運営室)
通訳、韓 京子(慶熙大学校)

研究発表

1. 韓国国立中央図書館所蔵『琉球暦』について
陳 捷(国文学研究資料館)
通訳、康 盛国(大阪大学大学院)
2. 『錦繡段』三種および『錦繡段詳註』
堀川貴司(慶應義塾大学ス道文庫)
通訳、康 盛国(大阪大学大学院)
3. 韓国国立中央図書館蔵の『聚分韻略』初期付訓刊本
岡島昭浩(大阪大学)
通訳、金 晳泳(同徳女子大学校)
4. 朝鮮時代の簡札の特徴
金 孝京(国立中央図書館図書館研究所)
通訳、李 仙喜(東京大学大学院)
5. 講評
金 貞禮(全南大学校)
通訳、李 仙喜(東京大学大学院)

閉会の辞

大高洋司(国文学研究資料館)
通訳、韓 京子(慶熙大学校)

内容を紹介しておく。陳捷氏は、清朝の『時憲暦』に基づいて琉球で独自に編纂された『選日通所』と呼ばれる琉球暦を紹介した。日本にも数点しか残っていないと言うことで、中央図書館に所蔵される刊本1点、写本7点の全8点の琉球暦は大変貴重なものとのこと。

堀川氏は、天隠龍沢編『錦繡段』の版本について発表。中央図書館蔵の三種を紹介するとともに、その字体の変遷などを紹介。『錦繡段』は元禄年間以降新刊本がほとんど出なくなるらしいのだが、中央図書館蔵の一本の書き入れによって、宝暦元年(1751)段階でも享受されていたことがわかるということで、貴重な情報を提供するものであることは興味深い。

岡島氏は、中央図書館蔵『聚分韻略』を、室町末期に刊行された無刊記本と同版であるとする。この本に付された付訓は、室町時代の付訓と江戸時代の付訓とを結ぶ、貴重なものであるのだが、日本国内では原本を閲覧することは難しいらしく、中央図書館蔵のものは貴重なものであるとする。

金孝京氏は、朝鮮王朝時代の書状についての概説をした。封の仕方や紙の使い方など、書札礼の基本がよくわかった。基本は漢文であるが、女性を送受信者である場合にはハンゲルで書かれること、紙を回転させながら書く「回文式」という書き方があることなど、大変興味深かった。韓国では常識であると思われるこのような事柄を知ることが出来るのは、交流会の大きな意義のひとつである。その翌日、韓国国立中央博物館を訪問し、展示を視察したが、見方がわかったことで、今迄素通りしていた書状をじっくり見るようにもなった。

金貞禮氏は、当館が調査に入る前、松野元館長が調査のための交渉をしていた時から、通訳や折衝に御奔走下さっていた。そのあたりの事情を含めて、交流会全般についての的確な講評をいただいた。

プログラムを見てもわかるとおり、必ず通訳をお願いしている。これも当初からのもので多くの方々に協力していただいていた成り立っていることが、このことからだけでもわかるだろう。また、資料については中央図書館で事前に冊子体(図2)に編集し配布している。そこには韓国語の訳も付されているが、これは中央図書館の安惠璟氏の訳したものである。安氏には、相互の連絡や調整など、多方面にご尽力いただいている。これまでご協力いただいた方々に改めて感謝したい。

調査の一応の終了を受けて、交流会も今回で一段落となる。今後については、日韓の古典籍を総合的に検討する場を設ける方向で調整を始めたところである。これまで築いてきた友好関係を活かしながら、更なる発展を遂げるよう努力したい。



図1 交流会後の記念撮影



図2 交流会資料冊子の表紙

第7回 日本古典文学学術賞受賞者発表

日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が主催していた日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的として当館賛助会に設置し、平成26年度で第7回となります。

第7回日本古典文学学術賞は、平成25年1月から12月までに公表された日本古典文学に関する論文又は著書を対象の業績として、論文又は著書を選考委員会で審議しました。

選考委員会における審議の結果、第7回の受賞者を^{きこしゆんすけ}木越俊介氏（山口県立大学准教授）に決定し、平成26年9月5日（金）にパレスホテル立川（立川市曙町）で授賞式を開催しました。

式では、選考委員会の寺島恒世委員（国文学研究資料館副館長・賛助会運営委員会委員長）による選考の経緯についての報告と本選考委員会の渡辺憲司委員（立教大学名誉教授、立教新座中学校・高等学校校長）による受賞者の業績について講評がありました。授賞式の後、引き続き、同ホテルで記念パーティを開催し、受賞者を囲んで歓談いたしました。



受賞者 木越俊介氏



左：寺島恒世 委員



右：受賞者 木越俊介氏

第7回日本古典文学学術賞選考講評

日本古典文学学術賞選考委員会

木越俊介氏の『江戸大坂の出版流通と読本・人情本』（清文堂、2013・10、A5判303頁、本体7500円）は、出版流通と作品内容の両面から、江戸後期（寛政－文政期）の読本（中本型読本と半紙本読本の一部）・人情本を分析したもの。

目次は以下のごとくである。

はじめに

第1部 十九世紀初頭の出版と流通—上総屋利兵衛の活動を軸に—

第1章 上総屋利兵衛と貸本屋一寛政～文化期江戸戯作の一齣—

第2章 上総屋利兵衛の読本出版

第2部 江戸大坂の読本流通—本替・類板をめぐる—

第1章 書物と地本の間—文化期後半の中本型読本をめぐる—

第2章 読本の本替

第3章 読本と類板—文化期の大阪を中心に—

第3部 巷説・情話の読本史

第1章 伝奇と情話—『西山物語』を読みなおす—

第2章 「春情」の目覚め—『棧道物語』から『環草紙』へ—

第3章 馬琴巷談ものの成立をめぐる—『括頭巾縮緬紙衣』の位置—

第4章 柳亭種彦『情花奇話 奴の小まん』と京伝・馬琴読本—分水嶺としての文化五年—

第4部 読本と人情本の間

第1章 人情本の外濠—文政年間中本の一考察—

第2章 暁鐘成『頓々拍子』小考

第3章 『奇談情之二筋道』について—読本改題本と人情本—

第4章 為永工房発・読本の作り方

付・資料紹介 『新にしき木物語』南仙笑楚満人(二世)序文

あとがき

ジャンルの未分化な状況を見据えて、そこに働いたさまざまな力を多角的に分析、中村幸彦「人情本と中本型読本」(『中村幸彦著述集』第5巻所収、中央公論社、1982〈初出1956〉)以降、飛躍的な進展の見られなかったこの期の小説史研究に、新たな視座を持ち込んでその総体を論じた意欲的な一書である。

全体は四部構成。江戸と大坂の読本を中心とした出版流通に関する第1部・第2部と、巷説や情話などを扱った作品群を考察して読本・人情本というジャンルの特質を改めて問い直した第3部・第4部、二つの柱から成る。

題名「江戸大坂の出版流通と読本・人情本」が、内容を直截に示している。所収された論文は全部で13本。網羅性と厚みには欠けるものの、各章の連関に配慮して相互の有機的構造を心掛けており、地域を越えた流通の重要性と、様式が未確立の諸ジャンルの生成をすくい上げている点に面白さを感じる。

第1部は、江戸の版元上総屋利兵衛を対象として出版流通のありようを描出し、文学史的な潮流との関係性を別扱したもの。文化期(1804-18)における本替や類板の実態を、主に制度面から詳細に解明した第2部とともに、その実証的な行論と犀利な分析によって明らかにしている。出版界の変容や全国的な書籍流通の戦略がどのようにジャンルに影響したか、作者や版元が広がってゆく読者層にどのように対応していったのか、この期の小説の流布と享受の様態が具体的に解明されたことの意義は大きいと言わねばならない。

出版や流通の研究と、小説の内容研究とが常に有機的に連動しており、木越氏本人の持つ小説史的なヴィジョンにきちんとつながっていることが注目される。典拠の研究でも、単に典拠を指摘することに留まるのではなく、そこからのズレによって小説の歴史的な変容の指摘に至るように書かれている。

これに対して、巷説や情話を軸にいくつかの小品(文芸的評価の低かったマイナー・ノベル)に温かな手を差し伸べて、その特徴を析出した第3部と第4部は、それぞれに一定の成果は認められるものの、全体としてはいささか小粒で趣味的な論文が寄せ集められたとの印象が拭えない。当代の文学史で従来扱われていた有名作品を除外して、文学史にほとんど登場しない小品を軸にこの期の小説史を記述するのであれば、時代ともっと切り結んで、時には踏み込んだ解釈をも提示すべきではなかったか。野心と堅実さがバランス良く同居している前半(第1部・第2部)に比べて、後半(第3部・第4部)は章ごとのバラツキが大きく感じられた。もっとも、論述の随所に、かつて国文学研究資料館における研究プロジェクトに参加して文政期の作品を網羅的に検討した氏の経験が生かされており、全体としての氏の取り組みはおおむね奏功している。

近年、いっそう研究の細分化が進み、視野の広い議論が行われにくくなっているのは各学会共通の問題点だが、ジャンルを横断して19世紀前半の小説史を捕捉しようと立ち向かう氏の研究姿勢はきわめて意欲的であり、高く評価することができる。

本書が若手の業績として優れたものであることは間違いなく、今後も継続して研究を深めていくことが期待できる人材だと判断して、選考委員会は全会一致で、氏に古典文学学術賞を授与することを決めた。

(文責 渡辺 憲司)

第38回 国際日本文学研究集会 プログラム

第38回 国際日本文学研究集会

主催：国文学研究資料館

後援：総合研究大学院大学

平成26年11月29日(土)

受付開始	12:00~
総合司会	イリグチ アツシ 入口 敦志 (国文学研究資料館准教授)	
開会挨拶	イマニシ ヨウイチロウ 今西 祐一郎 (国文学研究資料館長)	13:00~
【第1セッション】	司会 イトウ テツヤ 伊藤 鉄也 (国文学研究資料館教授)	
研究発表		
[1]	B. H. チェンバレンによる『古事記』英訳 — 「枕詞」の場合 タカハシ ノリヨ 高橋 憲子 (早稲田大学大学院博士課程)	13:10~13:40
[2]	三代集における紀貫之の位置づけについて オホノ ロベルト 大野 ロベルト (日本社会事業大学助教)	13:40~14:10
[3]	『源氏物語』が語るもの—宗祇『雨夜談抄』が開拓する「読み」とその意義 ノット ジェフリー KNOTT Jeffrey (スタンフォード大学大学院博士課程、早稲田大学外国人研究員)	14:10~14:40
	休憩 (10分)	14:40~14:50
【第2セッション】	司会 ウノ ケイスケ 海野 圭介 (国文学研究資料館准教授)	
研究発表		
[4]	『徒然草』における漢籍受容の方法—『白氏文集』の場合— コウ イク 黄 昱 (総合研究大学院大学博士課程)	14:50~15:20
[5]	『十訓抄』における孔子 ユウ ホウフン 尤 芳舟 (北京日本学研究中心博士課程、早稲田大学外国人研究員)	15:20~15:50
[6]	「大やうなる能」と「小さき能」—能の位とその典拠の正統性をめぐって— タラヌ ラモナ TARANU Ramona (早稲田大学大学院博士課程)	15:50~16:20
	休憩 (10分)	16:20~16:30
【ショートセッション】	司会 アオタ スミ 青田 寿美 (国文学研究資料館准教授)	
①	『うつほ物語』と近世国学者—文化三年補刻本『うつほ物語』絵入版本の書き込みから ムトウ ナカヨ 武藤 那賀子 (学習院大学人文科学研究客員所員)、富澤 萌未 (学習院大学大学院博士課程)	16:30~16:45
②	否定的な母親像と暗澹たるふるさと — 坂口安吾から見た「出自」論 — デウィ アングラエニ DEWI Anggraeni (インドネシア大学専任講師)	16:45~17:00
③	永井荷風「監獄署の裏」試論 トネ ナオキ 刀根 直樹 (東京大学大学院博士課程)	17:00~17:15
④	藤本事件と「熊笹にかくれて」—療養所内での救援活動の実態 ニシムラ ミネタツ 西村 峰龍 (名古屋大学大学院博士課程)	17:15~17:30
事務連絡会場移動	17:30~
レセプション	18:00~19:00

平成26年11月30日(日)

受付開始 9:30～

総合司会 カンサク ケンイチ 神作 研一 (国文学研究資料館教授)【第3セッション】 司会 フカサワ シンジ 深沢 眞二 (和光大学教授)

研究発表

- [7] 『秋夜長物語』の絵巻と奈良絵本について
—東京大学文学部国文学研究室蔵の絵巻を中心に—
キム コジロ 金 有珍 (東京大学大学院博士課程) 10:00～10:30
- [8] 黄表紙の批判性の再考
—青砥藤綱像を使用する寛政年間の黄表紙の特徴をめぐって—
チェンドム アンドレア CSENDOM Andrea (一橋大学大学院修士課程) 10:30～11:00
- [9] 鶴屋南北の合巻
ヒョン ヨンウ 片 龍雨 (東京大学大学院博士課程単位取得退学) 11:00～11:30
- [10] 多和田葉子とヨーロッパ
リゴ トム RIGAULT Tom (パリ第4大学博士課程、パリ第7大学博士課程、立命館大学客員協力研究員) 11:30～12:00
- [11] 「在満作家」牛島春子の女性文学
トウ レイカ 鄧 麗霞 (立命館大学大学院博士課程) 12:00～12:30

休憩 (90分) 昼食・ポスターセッション 12:30～14:00

【シンポジウム】 「図像のなかの日本文学」 14:00～16:50

- 司会 イタサカ ノリコ 板坂 則子 (専修大学教授)
パネラー ガーストル アン德里ュー GERSTLE Andrew (SOAS ロンドン大学教授)
ヤン ショウジ 楊 暁捷 (カルガリー大学教授)
トサ ナオコ 土佐 尚子 (京都大学教授)

休憩 (10分)

質疑応答 (30分)

総括 16:50～17:00

【ポスターセッション】

11月29日(土)～11月30日(日) (発表者による説明あり)

- 『忠臣蔵』の翻訳
—日本人の今として、過去として—
カワウチ ユウコ 川内 有子 (立命館大学大学院博士課程)
- <資料紹介> 鞍馬寺蔵・与謝野晶子自筆歌稿
セキ アキコ 関 明子 (東洋大学ティーチングアシスタント)
- 太宰治「誰も知らぬ」論
—オトメ共同体の外縁にある少女表象について—
オウ エイブン 王 盈文 (中華大学助理教授)
- 昭和十年代の「みやび」
オオイン サトコ 大石 紗都子 (東京大学大学院博士課程)
- 中国における星新一小説の受容
テイ ジョ 丁 茹 (鹿児島大学大学院博士課程)
- 国文学論文目録データベースの利用状況に関する考察
エクス ノリトモ 江草 宣友 (国文学研究資料館事務補佐員)

シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」の開催

国文学研究資料館の歴史資料に関わる3つの研究グループでは、東京都三多摩公立博物館協議会と共同で、博物館・資料館・美術館などの収藏品や民間に所在する地域歴史遺産を災害から守るための地域連携を考えるシンポジウムを開催します。

日時：平成26年10月30日(木) 午後1時～5時

会場：国文学研究資料館2階大会議室

主催：国文学研究資料館3研究グループ※ 東京都三多摩公立博物館協議会

内容：

- 〔講演①〕 鈴木毅彦(首都大学東京都市環境学部地理環境コース教授)
「多摩地域の地震と地盤災害—立川断層帯と首都直下地震の最新情報—」
- 〔講演②〕 西村慎太郎(国文学研究資料館准教授)
「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」
- 〔講演③〕 高橋健樹(武蔵村山市立歴史民俗資料館学芸員)・安齋順子
(くにたち郷土文化館学芸員)
「多摩の学芸員が関わっている文化財レスキュー—栄村における地域史料保全有志の会の事例から—」
- 〔講演④〕 新田建史(静岡県博物館協会事務局員)
「静岡県博物館協会の防災への取組」

〔パネルディスカッション〕コーディネーター：青木睦(国文学研究資料館准教授)

連絡先：東京都三多摩公立博物館協議会(平成26年度会長館) 公益財団法人多摩市文化振興財団(パルテノン多摩) 事業課学芸担当 TEL 042-375-1414(代)

※国文学研究資料館3研究グループ：①基幹研究「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」(代表：大友一雄)、②人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」のうち「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」(代表：西村慎太郎)、③同「東日本大震災における被災紙資料の保存と活用に関するソリューション研究」(代表：青木睦)



国際連携研究「日本文学のフォーラム」第2回国際シンポジウム

2014年1月に当館で開催した、国際連携研究「日本文学のフォーラム」(代表は伊藤欽也当館教授)の第1回国際シンポジウム「もう一つの室町—女・語り・占い—」(コーディネーターは小林健二当館教授)に引き続いて、第2回の国際シンポジウムを以下の要領で開催します。

◆テーマ：男たちの性愛—春本と春画と—

◆日時：2014年12月6日(土) 13:30～17:00(予定)

◆会場：国文学研究資料館2階大会議室

◆パネリスト：ダニエル＝ストリューブ(フランス/デイドロ大学)

ジョシュア＝モストウ(カナダ/ブリティッシュ・コロンビア大学)

中嶋 隆(早稲田大学)

石上阿希(立命館大学)

◆コメンテーター：染谷智幸(茨城キリスト教大学)

小林ふみ子(法政大学)

◆コーディネーター：神作研一(国文学研究資料館)

*事前申し込み：不要

*入場：無料

このシンポジウムでは、日本の江戸時代における男たちがいかなる性愛を求めたのか、主として春本と春画を軸に、その男性性の表象をめぐる、広く深く自在に、そして多角的に追究してみたいと思います。春本の出版に関する諸問題や、春本・春画の様式と趣向を考え、雅俗・和漢・地域・身分階層を横断的に考察して、彼らの性愛の種々相を解きほぐします。

どうぞふるってご参加下さい。

(神作 研一)

子ども霞が関見学デー

「子ども霞が関見学デー」が、平成26年8月6日(水)、7日(木)に文部科学省にて全国の小・中学生を対象として開催されました。このイベントは、子供たちが親の職場を見学すること等を通して、親子のふれあいを深め、広く社会を知る機会とするために、文部科学省が中心に始めた取組で、25府省庁等が職場見学や業務説明等を実施するものです。国文学研究資料館は、人間文化研究機構の一組織として出展しました。

国文学研究資料館は『さわれる和本』として、次の5冊の古書を展示しました。

- ・源氏物語の江戸時代に北村季吟による注釈書、『湖月抄』の第30帖『藤袴』、第38帖『鈴虫』、第46帖『権本』の3冊（源氏物語の数々の注釈書の中でも北村季吟のものが江戸時代特に人気を博しました。）
- ・『粹宇瑠璃』……江戸時代の洒落本といわれる滑稽な本の一つ
- ・『年中故事要言』の巻五『七夕』……季節のさまざまな行事を解説して、それらが和歌でどのように詠まれていたかを解説したもの



概要説明やさわれる和本の紹介

参加した子どもたちは江戸時代の本物の古書に触れて大興奮の様子でした。また、江戸時代に彫り師が彫った木版によって印刷されたものであることを説明されると、参加者たちは、その技術の高さに驚いていました。

また、今年度から設置した平安時代の貴族の顔はめパネルが子どもたちに人気で、写真を撮る親子で会場が賑わいました。



錦百人一首あづま織 後徳大寺左大臣（左）小式部内侍（右）

『HUMAN——知の森へのいざない』第6号

■人間文化研究機構監修

『HUMAN——知の森へのいざない』vol.06

平凡社、2014年7月23日刊、定価1500円+税

「日本の魍魅魍魎」を特集。巻頭で、妖怪研究の第一人者である小松和彦国際日本文化研究センター所長と作家の夢枕獯さんが「日本人は妖怪がお好き」と題して対談、縄文から始まって安倍晴明から漫画、アニメまでの民俗の深層を語っています。江戸時代は妖怪が流行し、文学のなかでも大きな位置を占めました。堤邦彦京都精華大学教授の「妖怪と仏教—鬼女の角をめぐる縁起伝承」をはじめ、近世文学の妖怪にかかわる論考も多く収載しています。カラーの妖怪紳士録や水木しげるのものなど、図も豊富です。



総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○入学者募集

平成27年度の入学者を、以下のように募集します。

【平成27年度入学者募集】

【概要】課程：大学院博士後期課程、学位：博士（文学）、募集人数：3名

【願書受付期間】平成26年11月28日（金）～12月4日（木）

【選考方法】修士論文等の審査、面接（平成27年1月29日、30日予定）

平成26年度に修士論文作成の受験生には、特例措置による修士論文提出締切として、平成27年1月6日（月）が設けられています。

また、平成26年10月25日（土）13時30分より、当専攻の入試説明会を国文学研究資料館にて行います。ご関心のある方は、国文研Webページ「総研大日本文学専攻」の問い合わせ先よりお申し込み下さい。事前申し込みなしでも構いませんので、多数のご来館をお待ちします。



○全国大学国語国文学会

平成25年度「文学・語学賞」受賞

岐阜工業高等専門学校一般科目（人文）科 助教

総合研究大学院大学平成22年度修士生 大橋 崇行 たかゆき

論文「美妙の〈翻訳〉—「骨は独逸肉は美妙／花の茨、茨の花」の試み」（全国大学国語国文学会『文学・語学』206号、平成25年7月）で、平成25年度「文学・語学賞」を受賞しました。この賞は、若手研究者の研究成果を顕彰することを目的として、『文学・語学』に掲載された論文に対して贈られるものです。

当該論文では、従来の研究で典拠不明の翻案作品として位置づけられていた山田美妙の「骨は独逸肉は美妙／花の茨、茨の花」（活字非売本『我楽多文庫』15・16集、明治20（1887）年12月・明治21（1888）年2月）について、早稲田大学図書館の本間久雄文庫蔵の自筆ノートを根拠として、この作品はチェンバースが刊行していた『英語読本』の第5冊（W.&R.Chambers, *Chambers's Standard Reading Books, book 5: Chambers Educational Course*, 1872）に掲載された「The Shepherd and the Prince」という小品を元に行っていることを論証しました。その上で、明治10～20年代にかけて行われていた英語やフランス語作品の翻訳という視点から見た場合、美妙が「花の茨、茨の花」で試みた文体がどのように位置づけられるのか、また、この作品でいわゆる「言文一致体」を用いたことにどのような意義があったのかについて考察したものです。受賞理由として、新出資料の報告だけでなく、それを具体的な問題意識に沿って論じようとした点、明治10年代に英語圏から入ってきた当時としては最先端の言語学的視点から、美妙の試みを再評価した点をご高評価頂きました。

こうした研究は、国文学研究資料館を基盤機関とする日本文学研究専攻で、原典に当たることの大切さや、それらを資料として扱っていくためのプロセス、また、資料を実際に読み解いていく方法について学んだことに基づいています。谷川先生、青田先生をはじめ、ご指導を頂いた国文研の先生方に、深く感謝申し上げます。

私は近年、明治期の文学・文化以外にも、現代のサブカルチャーについての研究も進めていますが、学問が多様化し、学際的・複合的な領域が重要視される潮流の中で、他領域の視点に基づいた研究に接するほど、原典資料を扱うことがひとつの強みになることを日々感じています。むしろ、そのように原典資料を扱う伝統的なあり方こそが、現代の文学研究に求められているのであり、私たちが研究活動を進めていく上での意味を生み出しているように思います。

今回の受賞において、美妙の手書きノートを判読し、そこから新しい資料を探していく地道な作業を評価して頂いたことは、非常に大きな喜びでした。これを励みに、今後も努力を続けて参りたいと思います。

11月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24	25	26	27	28	29

12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

1月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

- 開館：9：30～18：00
- 請求受付：9：30～12：00, 13：00～17：00
- 複写受付：9：30～16：00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館：9：30～17：00
- 請求受付：9：30～12：00, 13：00～16：00
- 複写受付：9：30～15：00

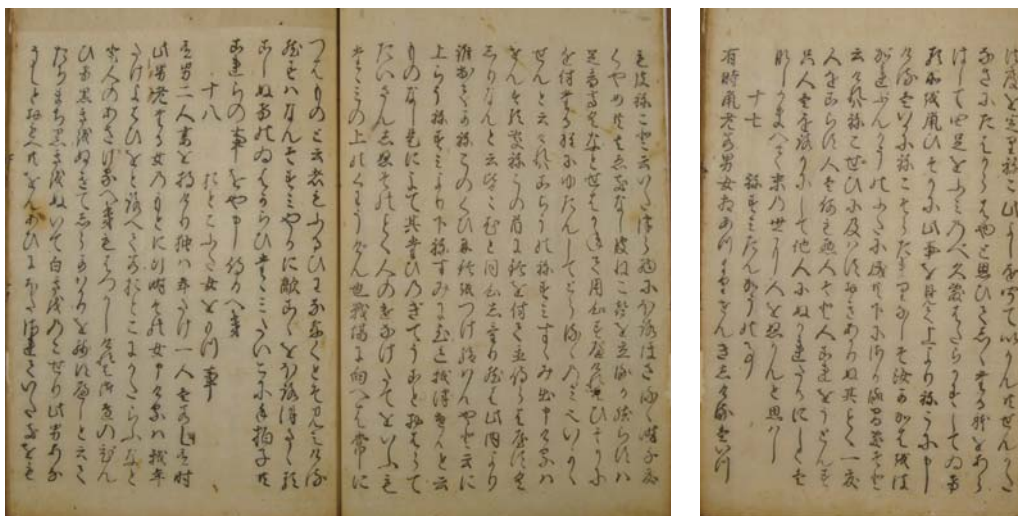
表紙絵資料紹介

伊曾保物語 (当館蔵 請求番号 99-191)

刊本、3巻3冊。縦27.4×横17.8cm。古活字版。刊記はないが、字様などから江戸初期寛永年間(1624～43)の刊行と推定される。中世ヨーロッパで広く流布した『イソップ寓話集』を文語体の日本語に訳したものの。ヨーロッパの文学作品が、近代以前の日本で受容された稀な例。

内容は、前半の伊曾保がその才覚によって様々な難題を解決する話群(約30話)と、後半の主に動物を主人公とした寓話群(約60話)に大別され、後者には、鼠達が相談して猫の首に鈴を付けることになったが、誰もその役を引き受ける者がいなかったという「鼠談合の事」、蛙が牛の大きさを真似ようとして、体を思いきり膨らませた拍子に腹が破れて死んだという「蛙と牛の事」など、おなじみの話を含む。

『伊曾保物語』の古活字版諸本は九種に分類され、この本は比較的誤りが少ないとされる第五種本に属する。第五種本は、ほかに宮内庁書陵部・刈谷市図書館の所蔵が確認されるのみ。古活字版以前に、いわゆるキリシタン版の一種として、文禄2年(1593)に天草で刊行されたローマ字表記口語体の『ESOPONO FABVLAS』(エソポの寓話)があるが、古活字版とは収録する話にかなりの出入りがあり、両者の基になった広本的な文語訳本の存在を推定する説や、文禄2年版における別系本の取り合わせを想定する説がある。(落合 博志)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日 平成26年(2014)11月1日
 編集 国文学研究資料館広報出版部
 印刷所 睦美マイクロ株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館